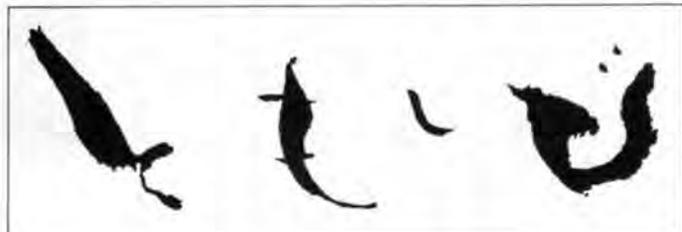


大学婦人協会東京支部

1990.2
第7号

- 「大学婦人協会事務所」誕生
- ヨーロッパ旅行記

「女性とリーダーシップ」のテーマのもと、研究報告、パネルディスカッション、分科会とバラエティに富んだ今年度のプログラムはすばらしく、何れも熱心な話し合いが行われた。IFUW総会出席者による報告は今回の特色であった。展示された写真からその会議の一端がうかがわれ、次回三年後の参加者の増加が期待される。

(海老原)

'89セミナー報告

全国から一四五名が参加し開催された今年度のセミナーは、会場が二年目という慣れも手伝い、また食事券の用意など昨年度の反省も生かされて、落着いた良い会議であった。受付、会場、懇親会など裏方も手際よく運んだ模様である。東京支部は、五人の実行委員と役員が各々の持ち場で協力した。

実行委員となつて

吉田桂子

先輩の誘いで大学婦人協会に入会し、東京支部役員としてやっと一年たちました。セミナーのことは全くわからない私が、実行委員として参加することにになりましたのは、今年度は委員を選出することになり大当りで引当ててしまったからです。

第一回セミナー実行委員会に出席した時、経験豊富な方たちは自分の担当をどんどん決めてゆかれるのに、新米の私は何が出来るのかよくわからず、最後まで隅の方で黙っていましたが、ハンドマイクを持って会場を走り回る役というのが残り、これなら出来る、と名乗りました。一緒にしましよと言ってくださる方もあり、会場係という所にきまりました。会場係の責任者の方を中心に、東京、神奈川支部からの担当者で顔合わせをしたとき、やっと居場所が定まって大変ほっとしてセミナー当日を迎えました。

会議の前日、ホテルに集合、指図のままに細々とした準備を手伝い、いよいよセミナー当日、会がスタートすれば待ったなしに分刻みに進んでいきます。会場の大磯プリンスホ

テルは、昨年に続いて二度目でもあり、事前の打ち合わせも徹底してすべて手際よく準備されてゆかのですが、それでは会場係は暇かというところではなく、食事は一番にすませて次の会が始まる前に掲示物を貼ったり、会の途中で資料を配布したり、ハエが一匹とびこんできたのが気になって気付かれないよう追ってみたり、勿論ハンドマイクを持ってすばやく発言者の所へ走ることもタイミングよくやらねばならず、スピードと体力が必要ねと言いながら二日間の役をつとめました。

全国からセミナーに参加された方たちが、会議に集中して一つでも多くのことを得て帰られるよう、裏方として参加した私ですが、会議で討議された「女性とリーダーシップ」の問題にも耳を傾け、どの役割も、引受けた方たちのすばらしい才能、お人柄に接することができ感謝しています。





大学婦人協会の草創期を語る その③

「大学婦人協会事務所」誕生

竹内和子

「大学婦人協会二十五年史」の年表

によると、昭和二十一年（一九四六）、

AAUW日本支部を発展的解消しJ

ACA (Japanese Association of

College Alumnae) として出発した

年、事務所は東京女子大同窓会内に

あり、翌二十二年、第一回通常総会

を開いた年は事務所は日本女子大内

にあったと書いてあります。その後

事務所についての記載はなく、昭和

三十六年六月、「事務所を桜蔭会旧館

に移す」とありますが、その前に一

時お茶の水女子大の講堂の裏の室に

あったように思います。会議は何処

でしていたのでしょうか。桜蔭会旧

館は終戦後会館を焼失し、母校で間

借をする不便さに手持ち財産を整理

して建てた木造建物で、暖房は旧式

なガスストーブでした。桜蔭会は好

意的で、事務所のみでなく会議をす

る場所もありました。

しかし大学の敷地に建てて大学に

寄付した建物ですから、家主は大学

で、また貸しというわけでした。

「二十五年史」の故氏家寿子元会長

の文を引用させていただきます。(任

期は昭和四十一年（四十四年度）

氏家会長は在任中「後に遺る記念

の事業」「架橋事業」をされたので、

その主旨は(1) AAUWとの合同セミ

ナー開催の準備、(2)協会事務所所有

の下ごしらえ、(3)外国に向かって本

会の奨学金贈呈を公表する事業の開

始であるという。以下氏家会長の文。

「ここで、昇天された今井よね姉の

高志を讃えずにはいられない。私が

就任した年の夏過ぎに今井よね姉(副

会長)から健康が思わしくないので

任に堪えないからと、再三辞意を申

し越された。その都度、御回復を待

つからどうぞ養生第一にされて留ま

って来てくださいたいという返事を繰り

返したのであったが、越えて翌年一

月、姉は健康を取り戻され委員長に

もなっただけだった。どんなに嬉し

かったことか。宇都宮の総会の前夜

もその夜も私は黒沢姉(副会長)と

今井姉と三人枕を並べて、語り合い

力づけ合いつつ夜の短さを啣ちなが

ら幸福であった。然るに何事ぞ、年

明けて遂に姉は協会を思いつつ召さ

れてしまわれた。私共は寛、片身そ

がれる思いであった。遺言により、

また遺産処理委員会の手により、本

会が多額の財産を受ける身となり、

奨学金をうるおわせ、そのまま充当

したのでないが、永年懸案の新事

務所を持つことに向かつて行動開始

の契機を得たのである。全てを知っ

ておられた御霊は、高きに在して嘉

納しておられることと、涙ながらに

私は信じ頭を垂れるものである。」

昭和三十三年社団法人となり、基

本金として一千万円を目標に募金を

始め、今井氏も目標達成に尽力して

いました。彼女は大変熱心な活動家

でした。逝去にあたり遺言によって

五十万円を寄付し、基本金は目標額

に達しました。更に、今井よね氏遺

産処理委員会によって、遺産の一部

一千百万円が遺贈されました。会員

の故若林花氏が委員の一人として、

また今井氏の秘書原節子氏も尽力し

て下さいました。今井氏の大学婦人

協会に寄せる志をよくこ存じでした。

大学婦人協会にかかる相続税が免

税になることが条件で、社団法人で

あるのみでは駄目で、真田淑子氏が

水田蔵相に交渉されました。その額

が免税にならないと、今井氏の関係

者で三十万円贈られる人は二十万円

課税されることになるので——とい

うことでした。

大学婦人協会の側にも遺産を頂く

意思があると議決したことを証明す

るために、何度も相談をし会議をし

て、その議決の記録を提出しました。

当時の役員は思い出されることでし

よう。その上、免税のため今井氏か

らの遺産で直接マンションを買って

はいけないということと、年表にも

「価格五二五万円、基本金から支出」

となつています。氏家会長も「その

まま充当したのではないが」行動開

始の契機を得たのである」と書いて

いられるのをこらなくください。

あちこち事務所を借り歩かなくて

もよくなりました。完成直前の段階

で、浴室にすべき所を書庫にし、ト

イレも意見一致して注文しました。

基本金から支出するには値段も適当

で、交通の便もまあまあで、暖冷房

を各戸するのも夜は無人になる事

務所としては好都合でした。氏家会

長の英断で決定しました。もっと便

利な場所の素敵な事務所ならもっと

いいでしょうが、それは将来の役員

会が考えられるでしょう。

(当時JAUW副会長)



他支部活動紹介

大阪支部

「全国総会で盛上がりを」

森本智江

大阪支部は全国総会を引受けさせていただいたお陰で、会員相互の親密さを増し、会員数も徐々に増え現在百十五名になりました。

今年度の活動は全国セミナーまでは、そのテーマに沿った学習。十月には「JAUW大阪支部四十年の歩み」という座談会を持ち、創立当初から御活躍の方を初め歴代支部長六名を含む二十五名が出席。永年の苦労話の中でも十五年程前国際総会を日本で持った時、大阪での見学会の御苦労等「まだその頃日本は発展途上国であった」とのお話は感銘深く、これから五十周年に向けて大阪支部活動の方向を探りつつ支部発展を期して盛り上がった例会でした。十一月は久々にバスで湖北方面余呉湖の秋を満喫し十二月は大阪ガスの科学館、工場見学を予定。後半は国際的な例会を持ちたいと準備中です。

なお毎月の短歌散歩の会は七年目。念願の会員若返りにも努力しておりますが、もっと社会的に働きかける活動こそ、大阪支部の宿題ではない

かと思えます。

熊本支部

「四十一年目の新しい出発」

出井ヤスコ

熊本支部は現在四十五名の会員を持ち、ここ数年間に六名の二十代会員を迎えました。勿論、経験豊かな熟年の会員も健在で支部の大黒柱となっておられます。私共が若い方々に伝えたいことも多くあることは確かですが、一方、ともすれば個人主義的になり、又孤立して家庭や職場に閉じ籠りがちな若い人達に自由で受容力のある集まりを経験してもらいたいとも思っているからです。

今年の支部活動は全国セミナーの準備が始まり、アンケート作成、実施、集計、考察と夏休みの終りまで続きました。一人の発表者のために多くの協力を得ることが出来たのはやはり共通理解の大きい大学婦人協会ならではの成果でしょう。発表者の中村恭子さんは「レポートは現状把握のための出発点に過ぎない」と言っておられますが、その出発点から次に何をすべきかが私共の課題です。私もヘルシンキの感動を忘れないよう、国際化社会の中の女性の生き方を考えて行きたいものです。

講演会

「どうなる！」

日本の政治と経済

慶応義塾大学教授 加藤寛氏

十月二十七日、第一生命ホールで行われた加藤寛氏の「今日まさに国民の総力をあげて各自が日本をどんな社会にするかを自覚しなければならぬ」というお言葉で始まった講演は氏の憂国の情熱とも言える信念がひしひしと伝わってくる快い緊張の一時半であった。現在国民にとって、最も関心の深い消費税を中心に据えて、一九二〇年代の金融恐慌から今日までの政治経済を氏一流の話術で論破されました。今の日本は物を消費しサービスを受けるのが楽しい社会。消費に価値がある社会となってきた。その消費から税を取るといふこと、別の言葉で言えば、所得税などの直接税が重すぎるので、それを減らして税を水平に取ること

る為にも消費税はやらなければならぬ。消費税は多くの国で既に行われている。世間で消費税を非難する声が高いがそれより世界の中でもこんなに高い日本の物価をさげることが急務、又3%の消費税を払い老後の生活を豊かにすることを考えることが二十一世紀に向かう日本の使命であると結ばれました。

帰りの道すがら、私は久しぶりの興奮を抑えることが出来ない気持ちになり、加藤氏がおっしゃったことを反芻していました。一つはテレビによって社会情報が操作され、作り出されていっているということ。又もう一つは一九七〇年代が物の自由化、一九八〇年代が金の自由化、そして一九九〇年代には人の自由化が起る、しかも人の自由化とは日本のように独特の文化を持っている国で文化的摩擦が避けられないということ。英語のTAXは参加費という意味で、所得が出来たら社会に参加しなさいということだとも言われま

確かに国民一人一人が応分の税負担をする、即ち参加をしなければ、これからの社会は成り立ってゆかないのだなあと痛感したのでした。

ヨーロッパ旅行記

加藤 恭子

I F U W 総会に出席する一行52名は7月26日賑やかに成田を出発しました。まずストックホルムに到着。翌日市内観光の後シリアライムの豪華客船で白夜のバルト海のクルージングを楽しみながら、総会の開かれるヘルシンキへと向かいました。

森と湖の国、サウナとサンタクロースの国フィンランドも、シベリウスのフィンランドディアに象徴されているような民族の悲しい歴史がある事をガイドさんから聞きました。開会式はヘルシンキ郊外のエスポーで国際色豊かに開催されました。翌日会議に出席する方々と別れて私達はレニングラードへ出発しました。空港からバスに乗り連れていかれた所はフィンランドとの合併で建てられた外国人専用のホテルで、予想よりはるかに近代的でしたが食事は貧しく蒸かした馬鈴薯が一番おいしく思われました。併し観光地は帝政ロシアの華やかさを彷彿させるような建造物が沢山保存され、当時の色彩ブルー、グリーン、ピンク、イエローに美しく彩られていました。ピョートル宮殿、聖イサク寺院、夏の宮殿

等を見物しましたが、最大の見所はネバ川に面して建つブルーの冬の宮殿内のエルミターージュ美術館でした。私達は毎日ホテルから市内への往復にレーニン像や公園に立ち並ぶ赤い旗を何回も見ましたが、このエルミターージュはソ連の印象とは異質の、華やかな西洋文化の宝庫でした。又私達は郊外の劇場で少々ドレスアップした町の人達と一緒に本場のバレエ「白鳥の湖」を観る事が出来ました。レニングラードの町の中では市民が買物の為にあちらこちらで行列を作り、若い女性達はカラフルな洋服とハイヒールをはいているのが目につきました。次はレニングラードから一先ずヘルシンキへ戻りハンガリーのブタペストに入る行程になっていました。往きは飛行機でレニングラードへ行ったので、帰りはコンパートメントの国際列車に乗りこみました。車窓からソ連の田園風景を眺めながら固いパンの朝食をすませた頃、列車はソ連最後の駅ピョルクに着きました。若いソ連の係官が入ってきて天井裏まで荷物を調べたあと出国手続きをすませ、再び発車

してフィンランドとの国境にきたところまで列車は全く動かなくなりました。やがてピョルクに戻り再入国させられました。フィンランド側のストライキの為列車が動かないとの事で、ヘルシンキからの迎いのバスがくる迄駅で7時間も待たされました。国境まで行かないとストライキがわからなかったり、大勢の乗客がお腹を空かせていても食事の世話もしない等は私達の常識では考えられない事でしたが、おかげで私達はソ連のエストニア共和国の人達と知り合いになり、そのリーダーの男の人から、何と近い将来独立運動を起すという事を聞かされました。帰国後間もなくエストニアを含むバルト三国が独立運動のデモ行進をした事が報道された。私は思わずテレビのスクリーンの中に、あの精悍なリーダーの顔を探したりしました。

ブタペストは西側諸国に近い為か社会主義国でありながら、明るく活気に満ちた美しい都でした。聖イスト大聖堂、ブタの王宮等を訪れ、ハンガリアンダンスを楽しみ、ドナウ川をクルージングで上り最後の訪問地ウィーンへ向かいました。ウィーンは森と音楽の都。シェーンブルン宮殿にハプスブルグ家の栄華を偲び

ウィーンの森では本場のワインナコーヒーとケーキで一休み。夜は宮廷コンサートで室内管弦楽に酔い、昼はケルトナー通りで最後の買物に疲れも忘れて歩き回りました。ドナウ川の漣でおなじみのドナウ川はハンガリー、チェコ、オーストリアの国境を流れ政治的に大変厳しいボーダラインである事も知りました。

帰国後東独の人達がハンガリーを通過して大量にオーストリアへ移動したニュースに接し、ヨーロッパの歴史的大変革の胎動時期に社会主義、自由主義両面を旅行できた事は、生涯忘れられない体験となりました。



風入

秋の鎌倉行

平田宏子

鎌倉五山の建長寺、円覚寺が、その宝物に風入をするという恒例の風入展が、ことしも十一月三、四日に行われ、私も東京支部では総勢四十名で馳せ参りました。北鎌倉駅に下り立ったもと乙女たちは、早速長寿寺に直行。美しいお庭を眺めながら、こちらで先ず床しい精進料理を堪能いたしました。本当に限られた素材のみを用いながら、工夫をこらし、手間を惜しまずに作りだされたお料理の数々。日頃の手抜きがちよつぱり反省させられました。

さて、いよいよ建長寺へ。さすがに五山の一位である当寺には、国宝、重文を含む百五十余点の宝物がところ狭しと展示されていました。中でも、建長寺開祖、大覚禪師の墨蹟やその遺品の数々が、七百年の時を経てなお大切に保存されているのが印象的でした。又、北条時頼の木製の彫像は鎌倉後期の作品で、当時の武士の正装が具現されていました。

つづいて円覚寺へ。こちらでは、支部委員の武田さんのお宅が円覚寺の古くからの檀家でいらっしゃる関係で、お寺の方で展示物のご説明までくださいました。又、今回の風入展の企画を熱心になすめてくださり、当日も本当に行き届いたお世話をくださいました同じく支部委員の斎藤さんは、現在、この円覚寺の古文書を読み解く研究会のメンバーでいらつしやいます。夥しい古文書や書画の展示された寺院の中を巡っており、また、戦乱に明け暮れた武家社会の人々が、禅寺に求めようとしたもの、また、当時の禅寺の勢い、更に又、その背後にいた数多くの庶民の息吹きまでが伝わってくる思いでした。

陽もやや傾きかけた頃、私どもは武田様のお力添えもあり、お寺側の格別のご配慮によりまして、国宝の舍利殿を目のあたりに見学させて頂くという光栄に浴しました。舍利殿の中には、釈迦の右の糸切り歯が舍利塔におさめられ、奉安されている由でした。舍利殿は柿葺きの古い木造建築（室町初期）で、典型的な禅宗様建築とのことでした。

毎年十一月に行われます風入展、今回お出でになれませんでした会員

の皆さまにもぜひおすすめしたいと思ひながら帰途につきました。



バス見学会

筑波研究学園都市の構想が発表されたのは東京オリンピックの頃だったろうか。科学万博で賑わったのも記憶に新しい。秋のバス見学会は樹々が美しく色づいた十一月十日、数多い研究所のうち三つの施設を目的として行なわれた。バスの中で本部教育委員長の金子堯子氏からその三つの研究所の仕事の相互関係について講義を受け、先ず蚕糸・昆虫農業技術研究所に到着。地元であつてもなかなか機会がないということ茨城支部から参加された十二名の会

員と合流した。この研究所は杉並にあった蚕糸試験場を母体として昭和六十三年に創立されたのだが、歴史の古さを示すように実に多方面の研究がなされており、素人にも分かり易いテーマも多くとても面白かった。昼食のとき、茨城支部の皆様からお心づくしの銘菓詰合を頂戴して、一同恐縮しながら大喜び。

午後は農業生物資源研究所のジーンバンクを見学。ここでは植物・微生物・動物などの遺伝資源の収集・分類・増殖・保存をしているのだが、この仕事は種類の多さが大切で、日本では約五万種だがアメリカでは四十万種集めているとのこと。追いつき追い越せと勇み立つには大分差がありすぎるなあというのが実感。

最後の機械技術研究所では、ロボットに取り組んでいる若い研究者達の仕事を見せていただいた。私達は日常何げなく歩いていても、これを機械にやらせるとなると一大事なんだという程度の理解しか出来なかつたが、このような地道な研究が集大成されて、日本の産業や生活を支えているのだと心から感謝する。

ほぼ予定通りに無事解散。いささか堅苦しいお勉強を予想していたが、後味の爽やかな楽しい見学会だった。

東京支部新入会員

(1989年11月現在)

氏名	出身校	住所	氏名	出身校	住所
守屋礼子	聖心学院		岡本真理子	実践学院	
西尾悦子	慶津		坂井千春	実践学院	
不破治子	聖心学院		嶋内友季	実践学院	
大谷幸子	聖心学院		平野和代	実践学院	
柳原由美	聖心学院		越田実代	実践学院	
佐藤留美	聖心学院		大谷恵美	実践学院	
野口和子	聖心学院		大岩美加	実践学院	
橋本祐美	聖心学院		長野葉子	同京横	
田嶋三子	聖心学院		山田英章	同京横	
草島三枝	聖心学院		井田かお	東立法中	
駒木光子	聖心学院		藤飼美子	東立法中	
鈴木和佳	聖心学院		阿部晴子	東立法中	
菊池悦子	聖心学院		三塚富子	東立法中	
新藤陽子	聖心学院		柴崎香	東立法中	
松本美仁	聖心学院				
明石羊子	聖心学院				
熊切圭加	聖心学院				
小川真佐	聖心学院				
高岡真美	聖心学院				
玄					

〔物故会員〕

松村歌子	東北女	88年11月16日
加藤セチ	福大	89年3月29日
古川綾子	福女	89年6月1日

謹んで御冥福をお祈り申し上げます。



法律相談講座

東京支部主催の「身近な法律相談講座」が、十月十九日、十一月二十九日の両日、婦人情報センターで開かれた。講師は第一東京弁護士会所属の中村久留美氏(会員)。

近年、世間一般で関心の高まった問題の中に、相続、贈与があるが、法律を知らなかった為に高い税金を納める結果となった事例は多い。結果が出てから、慌てふためいて弁護士事務所を訪れる人が大部分であるが、その段階ではどうにも手の打ちようがないのである。これからは日本でも、ホームドクターと同様ホームロイヤーをもたれることをお奨めすると中村氏は強調された。

第二回目は小人数のため、氏を囲んでの懇談形式になったが、そのためか出席者からかえって気軽に話題が提供され、和やかな法律講座となった。氏は、世の中を最も客観的に見られるもの、人と人との関係を端的に捉えられるものが法律であると述べ、女性弁護士としての立場から、法学部で学ぶ女子学生がもっと増えてほしいとも話された。なお、第三回目は二月七日(水)の予定。

東欧研修報告会

大森たへ子副支部長は先頃、国際婦人教育振興会からブルガリアとハンガリーに研修の為派遣され、まさに今激動する歴史の境目を経験、その貴重な体験を神奈川支部で発表された。12/9於横浜女性フォーラム。スライドを使って独特のユーモアを交えながら、コタイシステムに至れり尽くせりの幼児教育と恵まれた大学生活、一方で品不足に悩み行列が日常茶飯事という市民生活の現実等、教育と婦人運動に焦点をあわせ今の信じ難い様な自由化の波もむべなるかなと思わせられるような内容で、大変興味深い一時であった。

編集後記



●あけましておめでと。ございます。昨年は平成と年号も替わったり、フィンランドでの総会があったり、あつという間の一年でした。本年もともしびをよろしくお願ひ致します。●今回から題字が新しくなりました。題字についてはずっと悩み続けた懸案だったので、春野うらら氏の書と出会い、揮毫う頂き一件落着。灯の炎を象徴するような躍動感を感じて頂ければ幸いです。(津森)

ともしび七号 発行日 一九九〇年二月一日 発行 大学婦人協会東京支部 編集責任者 若井綾子
〒100 新宿区新宿七十七番八戸山マンション二四一号 Tel 〇三二二〇二一〇五七二 印刷 タナカ印刷機